
Clumsy Love

雪原歌乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

C l u m s y L o v e

【Nコード】

N 2 0 2 6 W

【作者名】

雪原歌乃

【あらすじ】

地元の大型スーパーで勤務する一穂は、仕事は無難にこなすものの、自称 男性不信。

そんな彼女が初めて意識した異性は、自分よりも八歳も年の離れた勤労学生だった。

二十代後半にして初めて芽生えた感情に、一穂は戸惑うばかりだが

……

Chapter 1（前書き）

『Clumsy Love』は、オトナレンアイ様出品作『非理想的結婚』を元にした現代恋愛です。

全体的にはのぼしていますが、所々でやや濃厚な性描写が出て参りますので、R15指定とさせて頂いております。

苦手だと思われる方は、御覧頂かない事を強くお勧め致します。

では、大丈夫な方は是非とも御覧下さいませ。

Chapter 1

とある県のK市。人口密度の多い都心から見たら、そこは遙かに田舎だが、それでも、県内では割りと発展した街である。

そのK市の中にある、スーパー タカミヤ。ここもまた、オープンした頃から客の出入りがそこに良く、十年以上経った今も地元住民はもちろん、隣県からわざわざ訪れる人も少なくない。

すすむらかすほ
鈴村一穂もまた、元々、タカミヤの常連だった。近所にあるから、というのが一番の理由だが、何より、一つの店で用を済ませられるというのが、モノグサな一穂にはとても有り難い存在だった。

そうして、週に二、三度の割合で通っているうちに、五年前、とうとうパートとして働く事となった。

元々、一穂は高校卒業と同時に、接客とは無縁な事務系の仕事をしていた。しかし、終始座りっ放しのデスクワークは彼女の性に合わなかったらしく、自ら退社。それでも、三年は働いたのだから、よくも辛抱したものだ、自分でも感心していたほどだった。

その点、接客は意外と相性が良かった。

人付き合いはあまり得意ではないものの、仕事だと割り切れば、お客と話をするのも、さほど苦に感じない。何より、声を出し、せつせと動き回っていると、ストレスもあまり溜まらない。理不尽なお客に理不尽な言いがかりを付けられ、不愉快な思いをさせられる事も多々あるが。

現在は、それなりに 先輩 としての風格が出てきたと、一穂も自覚している。一見、頼りなく思われがちでも、いざとなれば、堂々とした態度で立ち回れる。そのため、職場内ではかなり信頼されている存在だ。

ただ、頼られているのは同性からであって、異性からは距離を置かれている。いや、実際は、一穂の方が異性にかなりシビアだった。一穂は、自称 男性不信。きっかけは、大好きな従姉が、元夫

だった男性に浮気され、手酷い裏切り行為をされた事で、当人の従姉よりも、彼女がとても傷付いてしまった。

それだけではない。幼い頃、近所の悪ガキに、蛙や虫を無作為に投げ付けられたのもまた、一穂の不信感に拍車をかけた。

男とは、本当に低俗な生き物だ、と。

「あんたの男嫌い、一体いつになつたら治るんだかねえ……」

仕事が終わわり、休憩室で小休止を取っていた一穂に、八木倫子やぎのりこが、深い溜め息と共に漏らした。

「確かに、結婚が全てじゃないかも知れないけどさ。けど、いつまでも下らない事を引き摺り続けてたんじゃ、あんた、いつまで経っても女の幸せを掴めないよ？」

「余計なお世話」

倫子の説教に、一穂は、憮然として言った。

「それに私、今のままで十分満足してるし。男共より女の子の方が素直で可愛いじゃない」

「あのさ一穂……」

「何か？」

怪訝に思いながら首を傾げる一穂に、倫子は、辺りをグルリと見回してから、耳元に囁いてきた。

「あんた、まさかと思うけど……、そっち系じゃないでしょうね？」

「そっち系……？」

一瞬、倫子は何を言っているのか理解出来なかったが、少し考えるうちに、とんでもない事を考えている事に気付き、「ばっ、馬鹿言ってるじゃないわよ！」と、声を荒らげた。

「幾ら私でもそれは断じてない！確かにさっき女の子が可愛いって言ったけど、その……、そんな疚しい気持ちで女の子達と接した事なんて全然ないっ！」

一気に捲し立てた一穂は、何度も肩で息を繰り返した。

これには、倫子もさすがに驚いてしまったらしい。興奮を宥める

つもりで、一穂の背中をポンポンと叩いた。

「分かった分かった。今のは私が悪かった。でも、あんたの場合、誤解されたって仕方ないわよ？　だって、男の子と女の子に対する態度の違いは露骨過ぎるし」

「しょうがないじゃない。相手が男だと思つと、身体が勝手に拒否反応を示しちゃうんだもん」

「やれやれ……」

倫子は眉を顰めながら、片肘を着き、そつぽを向いてしまった。話にならんわ、と言わんばかりに。

「あ、でも……」

一穂は、先ほど倫子がしたように、ヒトの気配がないのを確認してから、小声で続けた。

「一人だけ、大丈夫そうな子は、いなくもない、けど……」

この言葉に、案の定、倫子が即座に反応を示した。げんなりした表情から一変、あからさまに、目を爛々と輝かせ、「誰誰誰よつ？」と、身を乗り出さん勢いで迫ってきた。

この変わり身の早さに、一穂は引いてしまった。同時に、やっぱり言うべきじゃなかったか、と少なからず後悔したのも本音だった。しかし、一度口に出してしまった以上、言わないわけにもいかない。ここで口を噤んだとしても、すつぱんのようにしつこい倫子の事だ。いつまでも問い質されるのは、嫌と言うほど一穂も理解していた。

一穂は、倫子からの視線を避けるように、宙に視線を彷徨させた。そして、少しばかり躊躇った後、その一人だけの張本人の名前を、ポツリと紡ぎ出した。

「高橋君、です……」

敬語になってしまうのは、一穂の照れ隠しの時の癖のようなものだ。むろん、倫子もそれはよく知っている。

「なーるほど」

倫子は、自らの胸の前で両腕を組むと、何度も頷いた。

「高橋君なら納得だわ。それにあんた、前に高橋君と二人っきりの時間を過ごした事もあったしねえ」

「ちよつと！ その変な誤解を招くような言い方止めて！」

精一杯抑えてはいたが、一穂の金切り声は、静まり返った休憩室の中で、十分過ぎるほど響き渡った。

「二人つきりつて言ったつて、あれはあんたが先に休憩終わって売り場に戻ったからでしょうがっ！ 場所だって社食だったわけなんだし！ 何より、高橋君自身は私に何の感情も抱いてないわよっ！」

「ほほう……」

倫子の口の端が上がった。

あまりに気色悪い表情に、一穂は、「な、何よ」と虚勢を張りつつ、すっかり身構える体勢となっていた。

「一穂、あんた相当高橋君を意識してるでしょ？」

「何でそんな発想に至るわけ？」

倫子の言葉に、一穂は冷ややかに問い返すも、内心は、心臓が飛び出そうなほど動揺している。

倫子は一穂の表情をまじまじと窺うと、目を爛々と輝かせた。

「私はね、あんたと違って経験豊富なの。どんなに誤魔化そうったって無駄よ無駄。」

でもいいんじゃない？ 高橋君は人畜無害そうだし、罷り間違っても、年増の処女を手籠めにするような馬鹿な真似は絶対にしないでしょ」

「ちよつとあんた、かなり酷い事言ってる自覚ある？」

一穂が真つ先に反応したのは、年増の処女 という単語だ。確かに倫子の言う通りだが、そこまで露骨に言うのもどうなのよ、と一穂は心底思った。

一方、倫子に悪びれた様子は一切ない。それどころか、鼻をフンと鳴らして笑われた。

「一穂も今更何言ってたんだか。私が思った事をありのまま口に出すのなんて、昔からだっただしょうが？」

ありのままに、正直に生きる、これが私のモットー！」

ここまで開き直られると、一穂はもう、返す言葉が見付からない。腹は立つが、半面で、自分に偽りなく振る舞える倫子が、少し羨ましい気もした。

（何だかんだ言いながら、私も結局、倫子と離れられずにいるしねえ……）

もしかしたら、自分は自分が考えている以上にマゾなのか、とも思ってしまった。

「とにかく、私も折角だから、あんたのために一肌脱いであげる」

「は？ 何言つて……」

「まあ、私に万事任せておけばいいから！」

「いや……、そうじゃなくて……」

突っ込もうとしたが、独りで盛り上がっている倫子を見ていたら、何を言っても無駄だと悟った。

（余計な事をしなきゃいいけど……）

深い溜め息と共に思った、まさにその時だった。

休憩室のドアが、カチャリと音を立てて開かれた。

一穂と倫子は、同時にそちらに視線を向ける。と、倫子の表情は、あからさまに狂喜に満ち、対照的に、一穂は瞠目したまま固まってしまった。

「あ、お疲れ様です」

二人に挨拶してきたのは、今まさに話題に上がっていた 高橋君 たかはしほまれ こと、高橋誉だった。

「高橋君ってばグッドタイミング！ 今上がり？」

「え？ ああはい、そうですね……？」

それが何か？ と言わんばかりに、誉は、妙にハイテンションになっている倫子を怪訝そうに見つめる。

（この馬鹿女っ！）

心の中で罵りながら、一穂は、あまりにも不自然に振る舞う倫子を一睨みした。本当は、脛の辺りを足蹴にしてやりたい衝動にも駆

られたが、そこはどうか抑えた。

一方、倫子は一穂の鋭い視線に気付いていながら、全く意に介した様子もない。悪びれもせず、ニヤリと嫌らしく口元を歪めると、誉に向き直った。

「ねえ高橋君、これから予定ある？」

「予定、ですか……？」

誉は、ますます眉根を寄せて首を傾げる。

一穂もまた、倫子は何を言い出すのかと不安が募った。今の不敵な笑みを目にした限り、口くでもない事を考えているのは明白だ。

そして、その嫌な予感は見事なまでに的中してしまう。

「私さ、旦那が待つてるから早目に帰んなきゃなんないのを想い出しちゃって。そんなわけで悪いけど、コレの相手してくれたらすごく助かるんだけどな」

もう、何をどう突っ込んだら良いか分からなくなってしまった。

仮に、誉が鈍感だったとしても、ここまであからさま過ぎたら、幾ら何でも変に勘繰られるだろう。

一穂は、腹が立つのを通り越して泣きなくなってきた。寧ろ、このまま逃げ出してしまいたかった。しかし、逃げたら逃げたで、また、誉の不信感を煽るだけかも知れない。そう思い直し、表面上は、努めて冷静を装っていた。

「それじゃあお二人さん、お先ねー！」

倫子は上機嫌で、予め用意していたバッグを肩にかけ、そのままスキップでもしそうな勢いで出て行ってしまった。

倫子が去った途端、休憩室は異様な沈黙に包まれた。

緊張が限界点に達した一穂は硬直し、誉も、一穂が男嫌いなのを嫌と言うほど知っているから、困惑を禁じ得ずにいる様子だ。（こういう時、誰か来てくれれば助かるのに……！）

強く願うも、この日に限って、休憩室にはなかなか誰も現れない。ただ、壁にかけられた時計の針だけが、一定のリズムを刻みながらカチコチと鳴り続ける。

「 すいません」

少しばかり経ってから、誉が不意に謝罪を口にしてきた。

一穂は驚き、思わず目を剥いた。

「何で謝るの？」

緊張は相変わらずだったが、それでも、感情を抑えて誉に静かに訊ねる。

誉は気まずそうに目を逸らすと、「あ、いえ、その……」と、お茶を濁した。

この態度に、一穂は苛立ちを覚えた。一穂も優柔不断な性格だと言えなくもないが、自分より若い、しかも女々しい異性は見えて気分の良いものではない。

「高橋君」

一穂の中の緊張は一気に吹っ飛んだ。代わりに、恐怖の女上司に変貌を遂げ、胸の前で両腕を組みながら、冷ややかに誉を睨む。「君、言いたい事があったらはっきり言いなさいな。私は君に謝られる理由なんて全く思い付かないけど、謝ってきたって事は、私に對して何か疚しい事があるからよね？ ほら、正直に言ってみなさい。別に怒らないから」

我ながら、とてつもなく嫌な女だと一穂も自覚していたが、モヤモヤとした感情の方が勝っている今は、どう思われようと気にならない。それに、上に立つ者であれば嫌われるのなんて当然よ、とも一穂に睨まれた誉は、彼女と視線を合わせまいとしているのか、あらぬ方向に視線を彷徨わせている。

だが

「 分かりません」

小さく、しかしはっきりと口にした。

「 は？」

一穂は眉を顰めた。

「『分からない』って……。高橋君、自分の事でしょ？」

「ですから、分からないんです」

負けじと返してきた誉が、一穂は心底心配になってきた。

（ちよつとこの子、本気でヤバくない？）

そんな事を考えながら、誉をまじまじと見つめると、誉は、フウと溜め息を漏らした。

「ただ、何となく謝った方がいいような気がしたから……。それに、俺と二人つきりなんて気分が悪いんじゃないですか？」

委縮していたはずの誉が、今度は、真っ直ぐに一穂を見据えている。それでも、目は落ち着きなく泳いでいるから、やはり、まだまだ緊張はしているのだろう。

次第に、一穂から力が抜けていった。同時に、笑いが込み上げた。ここは我慢すべきだろうとは思ったのだが、どうしても堪え切れず、とうとう、口元を手で押さえながらクツクツと喉を鳴らした。

「あの……、鈴村さん……？」

怪訝そうに一穂を見つめる誉に、一穂は、「ごめんごめん」と謝罪しつつ、それでも、笑うのを止める事が出来なかった。

「やっぱり、高橋君って違うなあって思ってた」

落ち着きを取り戻してから、一穂が言った。

「初めてまともに話した時だって、すぐく真面目に私の話を聴いてくれたでしょ？ 普通だったら、笑い飛ばされてもおかしくないような内容だったのに。それに今も、あんまりにも真剣な顔してるんだもん。もう、怒ってる私が馬鹿みたいに思えてきちゃったわよ」

「すいません……」

「ああもう！ 謝んなくてもいいってば！」

一穂は、気まずそうにしている誉に向けて、ニコリと微笑みかけた。

「高橋君が相手だと、私も警戒心が全くなくなるから。まあ、相変わらず、他の男子ははつきり言って苦手だけど……」

「そうですか」

誉は素っ気ない感じで返答していたが、一穂の言葉が嬉しかった

らしい。釣られるように、小さく笑みを浮かべた。だが、すぐに真顔に戻った誉は、「そう言えば」と続けた。

「鈴木さん、さっき八木さんが帰る前、『相手してやって』とか何とか言っていましたけど、何だったんですか？」

「え、ああ、あれは……」

邪気の全くなさそうな表情で問われた一穂は、答えに窮してしまっただ。

倫子の目的は確実に、誉と二人つきりにして良い雰囲気を持ち込もうという魂胆だが、そんな事、馬鹿正直に言えるはずもない。誉にドン引きされるのも、目に見えて明らかだ。

さて、どうしたものかと少しばかり考えた挙げ句、一穂は、自分でも驚く事を口走っていた。

「高橋君、送ろっか？」

誉と並んで従業員駐車場まで歩きながら、一穂は、胸の鼓動が高鳴り続けているのを意識せずにはいられなかった。

それにしても、何故、誉を送るなどと言ってしまったのか。口に出してから、咄嗟に、しまった、とは思ったが、一度出てしまったものを引っ込める事など出来るはずもない。

引っ込みが付かなくなった一穂は、一穂以上に驚きを隠せずにした誉の返答を待った。

誉は、どうすべきか考えていたようだった。しかし、無下に断るのもかえって失礼だと思ったのか、一穂の申し出に素直に応じてくれた。

一穂の愛車は、二年前、三つ違いの妹が新車を買った際、処分するのも勿体ないからと、譲って貰った軽自動車だ。

大学を出て、大手企業で順風満帆に仕事をこなしている妹と違い、安定した職に就かずにはフラフラとしていた一穂には、免許こそあっても、新車はおろか、中古車さえ買っ余裕すらなかった。だから、例えば、お下がりといえども、自分の車が持てた事は素直に嬉しかっ

た。ただ、車体の色が黄色というのが気に入らなかったが、タダ同然で譲って貰った立场上、偉そうに文句など言えるはずもない。

「女の人の車って初めて乗ります」

助手席に腰かけ、シートベルトを締めながら、誉は、車内をしげしげと眺めている。まるつきり子供だ。

「そんなに珍しいもんでもないでしょ？」

キーを回しながら、一穂は呆れつつ、苦笑いを浮かべた。

「いや、やっぱり違いますよ。まあ、どこが？　って訊かれても上手く答えられないですけど」

「何それ」

軽く突っ込みを入れてから、ギアをドライブに入れてアクセルを踏み込む。駐車場を出て、徐々にスピードを上げると、一穂は、チラリと誉を一瞥した。

すつきりと切り揃えられた自然なままの黒髪、顔立ちも至って普通だが、180前後はあるであろう長身だから、全く目立たない事はない。加えて、接客中の愛想も良い方だから、クレームどころか、一部のお客から鼻屑にされているという話を、以前、マネージャーから聴いていたのを思い出した。

（普通、若い子だと悪いイメージしか持たれないんだけどね……）
そんな事を考えていたら、誉と視線が合った。

「前見ないと危ないですよ」

やんわりと指摘され、一穂は慌てて視線を外して前を向いた。幸い、車体はセンターラインを越えず、左側を順調に走っていた。

「鈴木さん、聴いて貰ってもいいですか？」

運転に集中している一穂に、誉が話しかけてきた。

一穂は、今度は前を見たままだったが、誉が自分の横顔をジッと見つめている事に気付いていた。

「どうぞ」

平静を装いながら答えたが、内心では、何を言われるのかとハラハラしていた。仕事の事ではないのは、何となく察した。

「俺、気になる人がいるんです」

唐突な告白に、一穂は、危うくハンドルを切り損ねそうになった。それにしても、何故、このタイミングで一穂に言ってきたのかが分からない。鼓動も、駐車場に向かっていた時よりも更に速度を増している。

「そっか……。まあ、高橋君だって男の子だもんね。気になる女の子の一人や二人、いたって当然よね」

本当は、こんな事を言いたかったわけではない。しかし、問い詰める権利はないし、何より、年上の自分が取り乱す姿はみつともない。

「気になりませんか？」

重ねて訊ねてきた誉の視線が、とても痛い。

一穂は小さく深呼吸を一つしてから、笑みを取り繕った。

「何？ 私に聴いて欲しいの？」

「鈴村さんじゃないと意味ないですから」

一穂の全身が、一気に熱を帯びた。ハンドルを握る手も汗ばみ、握り締める手に力が籠もる。

（そんな事、絶対あり得ない……）

そう言い聞かせるも、心のどこかでは、誉の先に続く台詞を期待している。確かに、誉は唯一、一穂が普通に接する事の出来る相手だ。しかし、男性不信を貫き通し、一穂を男嫌いだと認識している誉が、ともに相手をするはずもない。

そんな一穂の想いに気付いてか否か、誉は静かに続けた。

「ほんととは、言うつもりなんてなかったんです。俺は、鈴村さんの男嫌いの事情も聴いてたし、応えて貰えない事も承知してましたから……」。

でも、急に今、言いたい衝動に駆られてしまつて……。多分、俺と鈴村さんしかない空間にいるせいだからかも知れませんが……」

誉が言い終えるのと同時に、目の前の信号が、黄色から赤に変わ

った。

一穂はアクセルから足を放すと、それをブレーキにかけた。

「私をからかつてる？」

緊張が限界点を超え、心にもない事を口走ってしまった。後悔したが、後の祭りだ。

案の定、誉は表情を曇らせた。可愛げのない、冷酷な女だと呆れられたに違いない。

「すみません……」

休憩室にいた時と同様、謝罪してきた。誉は悪くない。寧ろ、一穂が謝罪すべき立場だ。

「一々謝らないで」

刺々しい態度しか取れない自分がもどかしい。一穂は今、誉よりも、自分自身に対して腹を立てていた。

そのうち、信号が青に変わった。

一穂はアクセルに踏み直し、車を加速させる。

時折、ナビをするために誉が声を発したが、それ以外は、二人とも終始無言のままだった。

誉を送り届けてから、一穂はずっと、誉が口にした台詞一つ一つを、頭の中で繰り返し再生させた。

『俺、気になる人がいるんです』

『でも、急に今、言いたい衝動に駆られてしまっ……』

誉は、今時の若者とは思えないほど真面目な男だ。それは、一穂だけではなく、倫子を始め、職場内の誰もが口を揃えて言っている。だから、からかうつもりであんな事を言ったのではない事ぐらいは分かった。

（私は、高橋君を侮辱した……）

衝動的とはいえ、一穂の言葉で誉を傷付けてしまった事是否めな

い。色恋沙汰に慣れていないから　なんて、言い訳にもならない。結局は、元来からの天の邪鬼な性格が原因なのだ。右に行け、と言われれば、意地でも左を目指す。加えて、変な所でプライドが高いから、子供の頃から、両親の手を散々焼いてきた。

それを考えると、倫子は、よくも嫌な顔一つせず、一穂に付き合っ
てくれていると感心する。確かに、事ある毎に人をからかって楽しむという悪趣味の持ち主ではあるが、内心では、誰よりも一穂に心を砕いてくれている事も分かっていた。休憩室での一件も、素直になれない一穂を心配し、後押しするが故の行動だったのだ。

いや、もしかしたら、人の深層心理に聡い倫子の事だ。誉の気持ちにも勘付き、彼に機会を与えようとも考えたのかも知れない。

（やっぱ食えない女だわ、倫子は……）

自分の思惑通りに事が運んだ事を知れば、倫子はきつと、どうよ！　と言わんばかりに、得意気に踏ん反り返るだろう。少々腹立たしくは思えるが、それもまた、倫子らしいと言えば倫子らしいから、心底憎めない。

（これからもずっと、倫子との腐れ縁は切れないな、この調子じゃ）
やれやれ、と苦笑いを浮かべつつ、一穂は、アクセルを調整しながら自宅へ向かった。

その日の夜、十時過ぎ、夕飯も風呂も済ませて自室のベッドでまどろんでいたら、側に転がしていた携帯電話の着うたが鳴った。

一穂は、一気に目が覚めた。流れたメロディは、メール用に設定していた着うただったが、無視するわけにもいかないと思い、携帯を手を取った。

ディスプレイには、　倫子　と表示されている。言うまでもなく、発信元は倫子の携帯だった。

一穂は、うつ伏せの格好でメールを立ち上げると、すぐに目を通した。

かずほー、起きてたー？
電話してーい？

「やっぱり」

倫子は、すぐにでも話を聴きたかったのだろう。どのみち、職場内よりも電話の方がゆっくり話は出来るのだけど。

メールを読み終えた一穂は、返信画面に切り替え、即座に返事を打ち込んだ。いいよ、と。

すると、殆ど間を置かず、今度は電話発信の着うたが鳴り響いた。反応の速さに驚きつつ、一穂は電話を取った。

『オースス！』

これが本当に人妻か、と突っ込みたくなるようなオヤジ臭い挨拶が、一穂の耳に真っ先に飛び込んできた。

しかし、突っ込みを入れたいと思っていた張本人も、倫子と同様に「オース」と返したのだから、結局、どっちもどっちである。

『で、どうだったのよ？』

予想はしていたが、電話越しにも、倫子が好奇心を露わにしているのが伝わってくる。

一穂は少々引いてしまったものの、倫子の期待を裏切るのも憐れな気がして、一部始終を掻い摘んで話した。

倫子が一番大きな反応を示したのは、やはり、誉の告白だった。

『ちょっとマジでっ？ てか、何となーくそうかなあ、っとは思ってたけど。』

でも、これで相思相愛だったのははっきりしたんだし、あんたら付き合っちゃいな！』

「そんな簡単に言わないでよ……」

『どうして？ だって高橋君、あんたの事が気になるって言ってたんでしょ？ だったら何も問題ないじゃん』

「いや、私……、余計な事言っちゃったし……」

『余計な事?』

怪訝そうに訊ねてきた倫子に、一穂は一呼吸置いてから、「『か
らかつてる?』って、言っちゃったから……」と答えた。

『あんた馬鹿?』

間髪入れず、倫子の突っ込みが入った。

一穂はムツとしたが、ご尤もな突っ込みだから、反論など出来る
はずもなく、頂垂れるのが精一杯だった。

そんな状態になっている一穂に気付いているのか否か、倫子はな
おも、手厳しい言葉を投げかけてくる。

『あんただって、高橋君のクソ真面目っぷりはよく知ってんでし
よ? それに、年上の女に告白するなんて相当な覚悟が要ったはず
だよ? なのにあんたはもう……!』

私、心底高橋君に同情するわ……。いたいけな好青年の想いを無
下に扱っちゃうなんて……。ほんと残酷な女だよ、あんたは』

「そんなに言わなくなたっていいじゃない……。私だって、これ
でもすつごく反省してんだから……」

倫子の言葉は、一つ一つが一穂の胸にグサグサと突き刺さる。自
分が悪いのは重々承知していても、本気で泣きなくなった。

『で、どうする気?』

優しさの欠片も感じない、冷やかな声が、電話の向こうから聴
こえてきた。

『このままじゃ、ずーっと気まずいままだよ? 特に高橋君は、居
づらくて仕方なくなるんじゃない? 下手すると辞めちゃうかも知
れない』

「 やっぱ、謝った方が……。いいよねえ……。? 」

『そんなの自分で決めな』

突き放す物の言い方に、またしても、グサリときた。さすがに見
切られたか、と思ったが、『でも』と、倫子が言葉を紡いだ。

『自分の気持ちを正直に話せば、高橋君ならちゃんと分かってくれ
ると思うよ。』

私もさ、さつきはついつい調子乗って、付き合っちゃえ！　なんて言っちゃったけど、一番大事なのは、あんた達の気持ちだからね。一穂の話を聴いた限りじゃ、高橋君は別に、一穂と深い関係を望んでいるわけじゃなさそうだし。

でも、私の本音としては、あんた達がくっ付いてくれればいいと思うけどねえ』

ここまで言うと、倫子は、あはは、と声を上げて笑った。

再び、空気が和んだ。それを感じた一穂は、心の底からホッとした。

『とにかく、今度、高橋君と出勤が重なった時にでも、上手く捕まえて話しな』

「倫子がどうにかしてくれるんじゃないの？」

『高橋君があんたに直接告白した以上、私に出る幕なんてない。たまには自分でどうにかしなさい』

「マジ……？」

『当たり前でしょうがっ！　それに私が変にしゃしゃり出たら、かえって高橋君も気まずくなるに決まってるでしょ』

ここまで言い切られてしまっただけは、倫子を頼る事は期待出来ない。

「何とか頑張ってみるよ……」

『よしよし』

倫子が、電話の向こう側で満足そうに頷いているような気がした。『話ぐらいだったら、これからもちゃんと聴いたげるから安心なさい。』

おっと、そろそろ旦那がお風呂から上がって来そうだし』

どうやら、倫子の旦那が入浴し始めたタイミングで、一穂にメールしてきたらしい。倫子の旦那は寛容な人だが、さすがに長電話は迷惑だろう。そう思い、一穂からお開きにする旨を伝えた。

『今度は久々に呑みながら話そう。一穂が相手だったら、旦那も二つ返事で了解してくれるし』

「いい旦那さんだね」

『今頃気付いたか』

一穂の言葉で、すっかり惚気ている。口は悪くても、旦那を本当に好きなのは、一穂にもよく伝わってきた。

「それじゃあ切るね。倫子、明日は休みだっけ？」

『うん。久々に旦那と休みが重なったからデート。一穂は仕事だよね？』

「そ。あんた達がラブラブしている間、私はせつせと真面目に働きますわ」

やれやれ、と大袈裟に溜め息を吐くと、倫子はまた、声を上げて笑った。

『とにかく、明日は頑張りなさいな。じゃあ、ほんとに切るよ？』

「はいよ、頑張りますわ。じゃ、お休み」

『お休みー』

倫子の挨拶を潮に、どちらからともなく電話を切った。

「正直に話せば　か」

一穂は、倫子が言っていた言葉を反芻する。

本音を言えば、誉の反応が怖い。しかし、倫子の言う通り、気まぐずいままでいるのはもつと嫌だ。

一穂は、深呼吸を繰り返した。とにかく、今からでも心の準備をしておかないと、いざとなったら何も言えなくなる。そんな気がしていた。

「大丈夫、大丈夫……」

呪文のように唱えながら、一穂は仰向けになり、瞼を閉じる。

携帯を握りしめたまま、いつの間にか、深い眠りに落ちていった。

Chapter 2 第一節

誉は、一穗の車が見えなくなるまで、ずっと同じ場所に立ち尽くしていた。

（やつちまった……）

運転席の一穗に向け、思わず自分の気持ちを告げてしまった事を、今はひたすら後悔している。

言うつもりなどなかった。折角、一穗が自分には心を開いてくれたのに、これでまた、他の男達と同様、警戒されてしまうかも知れない。

「はあ……」

深い溜め息を吐くと、誉は、踵を返してアパートに向かう。

誉が住んでいるアパートは、築云十年という、非常に年季の入った二階建て。周囲からは、化け物小屋 と称されるほど、おどろおどろしい雰囲気醸し出している。だが、誉のように、毎月の生活費を切り詰めながらの生活を余儀なくされている学生には、建つて間もない高額の賃貸物件を借りる余裕などあるはずもない。

ちなみに、化け物小屋 実際には、コーポ松木 という、ちゃんとした名前があるが の家賃は月三万円弱。これ以上になりほどの破格な値段だ。

（鈴村さん、俺のアパートを見てビックリしたかも知れねえな）

誉は苦笑いを浮かべながら、自分の部屋 106号室の鍵穴に鍵を差し込んで回した。

カチリ、と鍵の外れる音が鳴る。

建て付けの悪いドアを開けると、すぐに、六畳一間の畳敷きの部屋が目に見え込む。一応、台所らしき場所もあるが、本当に申し訳程度の広さで、本格的に料理をするとなると、非常に不便だ。尤も、誉はあまり自炊をしない。台所へ立つ時は、冷蔵庫の物を取りに行くか、ガス台で湯を沸かす時ぐらいだから、拘りは殆どない。

誉は、ドアを閉めて靴を脱いだ。そして、その足で冷蔵庫に向かい、買い置きしておいた500ミリリットルのペットボトルのサイダーを取り出すと、壁に寄りかかる格好で胡坐を掻く。

プラスチックの蓋を握り、力を入れて回した瞬間、プシュツ、と気の抜ける音が、静まり返った空間に響いた。

蓋を完全に開けてから、中身をグイグイと呷る。緊張して喉が渴いていたから、炭酸の痺れる刺激が心地良い。

「ふう……」

半分ほどを呑み干すと、だいぶ気持ちが落ち着いた。

まだ、先ほどの事が心の中に燻っているが、口にしてしまった言葉は、二度と消し去る事なんて出来ない。開き直り、というのは言い方が悪くなるが、そう自分に言い聞かせる外ない。

誉は、ぼんやりと天井を見上げた。外装に負けず劣らず、ぶら下がった蛍光灯を覆った笠も、一体、いつの時代の物なんだ、と突っ込みの一つも入れたくなるほど、汚れがすっかり染み付いている。それにしても、これほどまでに一穂が気になるようになったのはいつからだっただか。いや、本当はちゃんと自覚している。

初めて、二人だけで会話を交わした日。あの時、社食に行つてみると、一穂と、一穂が一番親しくしている倫子が、女同士で顔を突き合わせながら話をしているが目に飛び込んだ。微かに、『高橋君』という固有名詞も、倫子の口から出ていたような気がした。

それが自分だと悟った誉は、二人に気付かれないように距離を置き、独りで食事をするはずだった。けれども、誉を目聡く発見した倫子は、大袈裟なまでに手を振って、自分達の席へと誘ってきた。

そうなってしまうては、避けるわけにもいかない。内心、気まずさを覚えつつ、手近な一穂の隣に腰を下ろした。

ただ、更に気まずさが増したのは、倫子がいなくなってからだった。

一穂が、誉と倫子の会話に全く入ってこない。それどころか、自分と目を合わせようともしてくれない。

よくよく考えたら、一穂は、誉に限らず、仕事以外で男とまともに会話をしている所を見た事がなかった。だから、男嫌い だともいうのも納得出来た。同時に、とんでもない質問を投げかけてしまった自分自身を呪った。

「好きな人、か……」

誉は独りごちた。

一穂に、好きな人の有無を訊ねた理由、あれは、一穂によりも、自分への問いかけだったように思う。

誉もまた、一穂ほどではないにしろ、異性に対するコンプレックスを多少なりとも持っている。

女と関わるとロクな目に遭わない。あからさまに避ける気もないが、深い関係を持つつもりもない。そう思っていたのに、一穂の存在だけは、日に日に自分の中で膨らんでいった。どこか、自分と似通っているから、というのもあるのだろうか。

（意外と可愛いトコもあるしな、あの人）

あの日、時間ギリギリになって慌てた挙げ句、椅子に躓いてよろけかけた一穂を想い出し、自然と口元が綻んだ。背中まで流れる黒髪を、邪魔にならないように後ろで一纏めにした、ちよつと澄ました美人も、実はおつちよちよいだったという一面を垣間見せてくれた瞬間だ。多分、本当に一穂を意識したのも、あの時だった。

（どうせ相手になんかしてくれねえと思うけど……）

そんな事を考えたら、誉は、再びガツクリと頂垂れた。

一穂とは、八歳も年が離れている。例え、一穂が 男嫌い じゃなかったとしても、あまりにも無謀過ぎる。愛があれば年の差なんて などと考えられるほど、誉は決してポジティブではない。しかも、貧乏学生 というオマケまで付いているから、尚更だ。

「不毛だ……」

自嘲するように吐き出した時だった。

ブーツ、ブーツ……

ドアの方から、ブザー音が二度鳴り響いた。いつ聴いても、非常に耳障りな呼び鈴だ。

「だあれもいませんよー」

出るのが面倒臭いのもあって、誉は、呟くほどの小声で、ドアの向こうにいるであろう 誰か に言った。

どうせ、新聞とか怪しい宗教の勧誘か何かだろう。そう思い、人の気配がなくなるまで身動き一つしなかった。
ところが

ブーツ、ブーツ、ブーツ、ブーツ……

誰か は、中に人がいる事を察していたのか、先ほどよりも、しつこくブザーを鳴らしまくる。近所迷惑も甚だしい。このままでは、別室の住人から苦情がくるのは確実だ。

誉は吞みかけのサイダーを畳の上に置くと、渋々と腰を上げた。
もし、本当に勧誘だったら、適当にあしらって追い払ってしまえば良い。

「はい……」

不快感を露わにしながら、誉はドアノブに手をかけ、開けた。
誉の表情が、更に険しさを増した。

（マジかよ……）

口には出さなかったものの、決して歓迎出来るような相手でなかった事は確かだ。寧ろ、勧誘の方がどれほど有り難かったか。

「来たよお、誉！」

そう言つて、誉の前でニツと笑ったのは、彼の幼なじみ 広瀬
真希^{せまき}だった。

「最近、めつきり連絡取れなくなっちゃったんだもん。くたばってないかって心配してたんだよ？ まあでも、無事に生きてて何より！」

「何しに來たんだよ……？」

ようやく絞り出した問いに、真希はわざとらしく肩を竦めた。

「そりゃあ、あんたを心配して見に來たんじゃない。どうせ口なもん食べてないんでしょ？ 角のコンビニでお弁当を調達してきたら一緒に食べよ」

真希は、誉の了承も得ず、靴を脱いで、彼を押し退けるように室内へと足を踏み入れた。止める間もなかった。

部屋を中心まで来ると、真希はコンビニ袋の中の弁当を取り出し、ローテーブルの上に並べた。弁当は全部で三つ。のり弁と唐揚げ弁当と幕の内弁当と、当たり外れのないオーソドックスな物だった。

「一つ多いんじゃないの？」

誉が突っ込むと、「あんたは二つ」と、当然の如く、真希に返された。

「誉は男なんだし、軽く平らげられるでしょ？ しっかり食べて体力付けないと、勉強も仕事も捗らないわよ？」

「俺そんなに大食いじゃねえし……」

「つべこべ言わずに食う！」

真希は、唐揚げ弁当と幕の内弁当を重ねて、誉に押し付けてくる。誉は片頬を引き攣らせつつ、反論する余地もないと悟り、黙ってそれらを受け取った。

「あ、飲み物ある？ 買うの忘れちゃったからあったらお願い」

「はいはい……」

誉は弁当を一旦テーブルに置くと、冷蔵庫から500ミリペットボトルの緑茶を一本取り出し、再び戻った。自分の分は、畳に放置していたサイダーがまだ残っている。

「さ、食べよ！ お腹空いちゃった！」

真希は、いただきますーす、と挨拶してから、のり弁のフィルムを破り、割り箸を割った。

誉もまた、挨拶こそしなかったものの、真希に倣うように、唐揚げ弁当を開けた。電子レンジで温められているから、開けた瞬間、

フワリと湯気が立ち上った。

「　　ねえ誉」

誉が唐揚げ弁当をほぼ平らげた頃、真希がポツリと口を開いた。

誉は、割り箸を持ったまま、真希に視線を注ぐ。

「また、ダメになりそう……」

「何が？」

「　　今の彼と……」

真希の言葉に、誉は、またか、と呆れた。

真希は昔から、異性との関係が派手な方だった。目鼻立ちのはつきりした美貌に加え、明るい性格だから、昔も今も男子に人気がある。

誉も、真希を異性として意識した時期があった。高校の頃に想いを告げ、男女の関係にまで発展した事もあったが、恋人としては長く続かなかった。

しかし、ただの幼なじみに戻ってから、真希は、変わらず誉に構ってくる。

対照的に、誉はいい加減、真希と距離を置きたいと思い、わざと実家から離れた大学を受験したのだが、あろう事か、真希は誉を追っ駆けて来たのだ。

真希曰く、誉を放っていたら絶対餓死するから、らしいが、余計なお節介もいい所である。寧ろ、真希に側をウロチヨロされると、精神状態がおかしくなりそうだった。

実は、タカミヤ でアルバイトをしようと思ったのも、最低限の生活費を稼ぐという目的も確かにあったが、真希から解放されたという理由が一番大きかった。

「お前さ、俺んトコに来る暇があるんだったら、彼氏と仲直りするための努力なりしたらどうだよ？」

同じような説教も、これまで何度してきた事か。いい加減、言うのも飽きてきているのに、思いとは対照的に、ついつい口に出して

しまう。やはり、心のどこかでは放っておけずにいるのだろうか。

「めんどくさい」

吐き捨てる勢いで、真希は言い放った。

「だって、告白してきたのは向こうだよ？ 外見はそこそただけど、性格は悪くなさそうだったから付き合ったのに……。それなのに、いつ、『真希」といって疲れる』って！ 私は私であいつに合わせてきたのに、あの言い草はないんじゃないのっ？」

「俺に当たるな。不満なら、本人に言えればいいだろ？」

「言ったって聴いちゃくれないもん！」

話にならん、と思いながら、誉は深い溜め息を吐いた。

（どう考えても、絶対こいつが悪い）

強情の度合いが過ぎる真希の性格をよく分かっているがために、真希よりも、相手の方へ同情してしまう。外見だけで真希に言い寄った相手にも、非がないとは言いが切れないが。

「とにかく、俺に八つ当たりしたって何の解決にもならねえだろうが。とつと食って帰って、相手とじっくり話し合え」

「あんた……、いつからそんな冷たい奴になったのよ……？」

「別に普通だろうが」

眉を顰めながら答えた誉の顔を、真希は、ジッと凝視した。

「な、何だよ……？」

誉は、わずかに身を仰け反らせた。

「女でも出来た？」

「はあっ？」

真希の無遠慮な質問に、声を荒らげてしまった。

だが、真希は臆した様子はなく、なおも誉の表情を窺いながら、続けた。

「だって、いつになく私の扱いが邪険だもん。ちょっと前までは、もうちよっとソフトだったよ？ となると、女がいるって考えちゃうのは当然じゃない？」

「……どう思う思考回路してんだよお前は……」

誉はガツクリと頂垂れた。確かに、真希の指摘は的を得ている。だが、女がいる わけではない。

「ねえねえ、誉が好きになった人ってどんな人？ 私の知ってる人？ 今度紹介してよ」

「ああもう！ 誤解だ誤解！ 俺はずーっと独り身だ！ さつきから言ってるんだろ？ 分かったら食ってとっとと帰れ！」

切れかけていた誉は、自分でも驚くほどの剣幕で真希に言い放った。

さすがの真希も、これには絶句していた。暫しの間、目を見開き、口を小さく開けたままの状態でいたが、やがて、「分かった」と小さく口にした。

「もうちよつとしたら帰るから……」

その言葉通り、真希は、自分の弁当を綺麗に平らげ、緑茶も空にしてから、誉のアパートを後にした。

自分を心配して来てくれたのに、真希を無下に追い返すような結果になってしまい、誉も少なからず後悔した。しかし、真希に入り浸られるのもまた、心底迷惑だと思っていた。少しぐらい厳しく言わなければ、真希は分かってくれない。

「俺の女になんて、なるわけねえだろ……」

食べかけの唐揚げ弁当を虚ろに眺めながら、誉は、一穂の事を思い浮かべる。

誉の中の一穂は、眉根を寄せながら、困ったように笑みを浮かべていた。

翌日は平日だったため、日中は学校へ行き、夜になってから仕事へ向かった。勤務時間は、七時から閉店まで。正確にはレジ精算もあるから、プラス十五分の勤務になる。

勤務表を見た限り、確か、今日は一穂も遅番として入っている。昨日の今日だから、出来る事なら顔を合わせる事は躊躇われる所だが、理由もなく欠勤をするような度胸なんて誉にはなかった。

（普通にすればいいんだ。普通に……）

更衣室で軽く着替えを済ませ、心の中で言い聞かせながら売り場内のサービスカウンターに向かうと、真っ先に一穂と遭遇した。しかも、あろう事か、カウンター内には一穂しかいない。

一穂もまた、誉と同じ事を思っていたのだらう。誉の顔を見るなり、ハツとしたように、僅かに目を見開いた。

ほんの少しの間ではあったが、互いに目を逸らせずに立ち尽くしていた。

だが、いつまでも黙ったままでも仕方ない。

「おはようございます」

きつかけ作りとばかりに、誉から先に挨拶した。

すると、一穂も我に返り、「おはよう」と返してくれた。微かに微笑んでいたが、表情は固いままだった。

誉は口元に笑みを浮かべながら軽く会釈し、自分が入るレジに向かった。いい加減に行かないと、これから上がりの従業員との交代だから待ち草臥れているだらう。

レジ交代し、入ってから、ぼんやりと店内を見つめていた。今日は、六時台までは忙しかったらしいが、それ以降は客足がすっかり引き、信じられないほど静かになってしまったという。『いいタイミングで来たわよね』と、誉の前に入っていた従業員の女性に、軽く嫌味を言われたほどだった。

お客が疎らな店内を一通り見回してから、誉は今度は、サービスカウンターの方へ視線を送る。

一穂はパートではあるが、勤務歴五年、加えて仕事もそつくなすから、日間の勤務スケジュールの作成、消耗品の発注など、社員並みの仕事をしている姿もよく目にした。

恐らく、今もきつと、スケジュール作成をしているのだらう。カウンターの中心の台に両肘を置きながらペンを片手に書き物をしている様子が、離れた場所からでも分かった。

「……し、高橋！」

突然、背中越しに呼ばれ、誉はわずかに肩をピクリと反応させた。首を動かし、声のした方に視線を向けると、誉と同じ大学生アルバイトの原田隆太が、怪訝そうにこちらを睨はらだりゆうたんでいた。

「お前、何ボーっとして見てたんだよ？」

「べ、別に何でもねえよ」

「ふうん……」

隆太は、なおも怪しげに誉を一瞥した後、誉の視線の元を辿った。
「まさかあの女？」

そう言って、隆太が顎をしゃくった先には、まさに誉が見ていた相手　一穂が、先ほどと変わらずに書き物をしている姿があった。誉はギョツとした。よりによって、こいつに気付かれるって、と内心焦りつつ、「ちげえよ」ときっぱり否定した。

「全然別の場所を見てたんだよ。鈴村さんじゃねえ」

「にしちやあ、すっげえ動揺してるように見えっけど？」

「うるせえな。誤解もいいトコだ」

「そうやって慌てるってのが、ますます怪しいぜ？」

「お前いい加減にしろよ。幾ら暇だからってあんまり私語が多過ぎると、またお客さんからクレームがきて、マネージャーにこってり絞られるぞ？」

「へーへー。高橋クンはほんっとーに真面目ですねえ。さっすが、オバハン達のアイドルだけありますわ」

隆太はわざとらしく両手を上げ、肩を竦めた。嫌みたっぷりの口調も腹立たしく、一発怒鳴り付けてやりたい衝動に駆られたが、仕事上という事もあり、ここはグツと堪えた。

（この野郎……！　後で憶えてやがれ！）

誉は、隆太を一睨みしてから、心の中で吐き捨てた。

それから間もなく、誉にとっては、本日第一号のお客が来た。

「いらっしやいませ」

つい今しがたまで、隆太に不愉快な思いをさせられた誉だったが、お客を前にしたら、自分でも驚くほど、接客モードに素早く切り替

わった。

お客は、三十代と思しき男性と女性だった。夫婦か、はたまたカップルかまでは分らないが、二人の会話の感じから、浅からぬ関係である事は間違いない。

男性が持っていた買い物カゴの中には、20パーセントの値引きシールが貼られた弁当とプリンが二個、半額になったカツオのたたきの切った物が入っている。

（多分、割り箸とスプーンが要るな）

そう判断したものの、念を押す意味も含めて必要かどうか訊ねると、やはり、「二個お願いします」と、女性の方から返ってきた。買い物量が少ないのと、袋持参ではなかったのもあって、誉は、通した商品の一つ一つ袋詰めする。

お客の二人は、その様子を黙って見ていた。

「1028円になります」

精算になると、男性が千円札を一枚出した。だが、小銭がなかったらしく、女性に視線を向ける。

女性は黙って頷き、自分の財布から十円を三枚、千円札の上に載せた。

「1030円お預かりします」

口頭通りの金額を打ち込み、その後は、釣りの一円玉二枚をレジートに載せて返却した。

「ありがとうございましたー！」

静まり返った店内に、誉の声が響き渡る。

お客の男女は、会計が終わると、背中を向け、互いの手を取り合った。男性の反対側の手には、品物が詰められた買い物袋が握られていた。

二人の背中を少しばかり見送ってから、誉は再び定位置に戻った。ふと、サービスカウンターの方を見てしまいそうになったが、隆太の存在を思い出し、見ないようにと意識した。

隆太は、お客が自分のレジに来るまでの間、誉の様子を窺ってい

た。少しでも一穂を見たら、茶々を入れる気満々だったのは、嫌と
いうほど伝わった。

Chapter 2 第二節

閉店後、レジ精算を済ませ、レジの従業員は定時通りに上がった。着替えのために入った男子更衣室には、誉と隆太の二人。嫌な予感はしていたが、やはり、勤務中の余所見の事をしつこく追及された。

「で、あの女のどこがいいわけ？」

一穂の目が届かない所で、隆太が あの女 呼ばわりするのは、お高く構えた態度が気に食わないからだ。

「だから誤解だっつってんだろぅが」

いい加減にしてくれ、と心底思いつつ、誉は答えた。

「大体、俺とあの人じゃ年が離れ過ぎてる。端っから相手にしてくれるわけねえだろ」

「ん？ つう事はやっぱり気があるんじゃないか」

「だーから……」

否定するのも次第に疲れてきた。かと言って、はつきり認めてしまつのも癪だ。

「てか、もういいだろ？ 人の事に構ってる暇があるんだったら、自分の心配でもしたらどうだ？」

「お前……、ほんつと性格わりいな。仕事中は、気味悪いほど愛想良くしてるつつうのに」

「何とでも言え。俺はただ、仕事とプライベートとを使い分けてるだけだ。」

さ、この話は終了！ 俺はもう帰るからな？ お疲れ！」

誉は締め挨拶をすると、逃げるように更衣室を後にした。

従業員通用口を出ると、辺りは真つ暗な闇に包まれていた。秋が近い事もあって、虫達が競うように合唱をしていたが、それ以外の音は全くない。

誉はバッグを肩にかけ直し、暗闇の中を歩き出す。アパートまでは、のんびり歩いても三十分もあれば着く。

「高橋君っ！」

200メートルほど進んでから、透明感のある女性の声に呼び止められた。

誉の心臓は、跳ね上がりばかりに速度を増した。この声の主の正体は、すぐに分かった。

誉は足を止めると、一呼吸置いてから振り返る。

やはり、声の主は一穂だった。一穂は、踵の細い不安定なサンダルで小走りして来る。そして、誉に迫り着くなり、「高橋君、ちょっといい？」と訊ねてきた。

避けられていると思うていただけに、一穂から声をかけられたのは意外だった。

誉は驚きつつも、嬉しかった。口元も自然と綻び、「はい」と二つ返事をしたが、咄嗟に隆太の存在を想い出し、続けた。

「ただ、場所を変えませんか？ 原田の奴がこれを見たら後で何と言つか……」

何故、隆太の名前が出てきたのかと、一穂は思ったに違いない。しかし、一穂も何やら察したのか、「分かったわ」と頷いた。

「じゃあ、私の車で」

そう言って、一穂が先に立って歩き出した。

また、密室で二人きりになってしまふ。誉の脳裏に、昨日の事が過ぎつつが、人目に付き難い場所は車内以外になさそうだと思い直し、素直に従った。

閉店後の従業員駐車場は、車も数えるほどしか止まっておらず閑散としている。一応、電灯も取り付けられてはいるが、心許ない明るさだから、女性がたった独りにいるには危険なのでは、と、つつい余計な心配をしてしまう。

それにしても、昨日も思った事だが、黄色い軽自動車は、一穂に

似合わず随分と派手で目立つ。車に乗ってから、間を持たせる意味も含め、車は自分で選んで買ったのかと訊ねてみたら、一穂は、「妹のお下がりなのよ」と、肩を竦めながら苦笑した。

「私は妹と違って収入がないから、新車を買うだけの贅沢は出来なからね。黄色なんて、あんまり趣味が良くないけど、タダで譲って貰ったんだし、有り難いと思わなきゃ。それに、最初は抵抗があっても、運転してるうちに愛着って湧いてくるもんよ」

そこまで言うと、一穂はキーを差し込んだ。エンジンをかけると近所迷惑になるからと、敢えてキーは回さずにいるようだ。どのみち、今は少し肌寒いぐらいだから、日中に、ほど良く熱が蓄積された車内の温度は丁度良い。

しかし、音がない分、会話がないと身が持たない。車の話が終わると、話題が出ず、外以上に沈黙が流れる。緊張のあまり、唾を呑み込む音がやけに響いた。

誉は、窺うように、運転席の一穂を見遣った。

仕事中は纏められている長い髪も、今は下ろされ、背中まで真っ直ぐに流れる。職場の規定にもなっているからだろうが、メイクは至って自然。それでも、一穂の美貌は際立っていた。

（勿体ない）

他人事ながら、誉は思う。鈴村さんほどの美人であれば、誰も放っておくわけがなかっただろうに、と。

ふと、視線を感じたのか、一穂がこちらを見た。

すっかり一穂に見惚れていた誉は、完全に目を逸らすタイミングを失い、互に見つめ合ってしまった。

「高橋君」

誉を真っ直ぐに見据えたまま、一穂が口を開いた。

誉は息をコクリと呑むと、彼女から紡がれる続きを待った。

「昨日は、ごめんなさい……」

予想外の謝罪だった。これにはさすがに驚きを隠せず、思わず、一穂をまじまじと凝視してしまった。

その視線をまともに受けた一穂は、困ったように眉根を寄せながら、口元を小さく緩めた。

「私変な事言った？」

「あ、いえ、別に変な事は言っていないですけど……。でも、まさか鈴村さんが自分に謝ってくれるなんて思ってもなかったの……」
「何それ？ それじゃあ高橋君は、私を冷血漢か何かだと思っただの？」

「そうは言っていないですよ……」

誉は項垂れるしかなかった。昨日と同様、余計な事を言うから、一穂を苛立たせてしまふのだ。

（謝ったりしたら更に悪化する、絶対……）

そう思った時だった。

一穂から、微かな溜息が漏れた。そして、それに続き、「ごめんと、再び謝罪を口にした。

「昨日といい今日といい、高橋君に酷い事言っただよな、私ってば……。すぐ他人に突っかってしまふ性格、自分でも凄く嫌だから直したいって思ってるんだけど……」。

ほんとにごめんね、高橋君。私、ヤな女でしょ？」

自虐的な言い方が、誉はかえって辛かった。誉だって、生半可な気持ちで一穂を見ていたのではないのだから。

「俺は、どんな鈴村さんでも受け入れますよ」

誉は、一穂の瞳を真っ直ぐに見つめた。今度は、一穂が目のやり場に困っているようだったが、気にせず続けた。

「俺も、この際ですから正直に話しますが、女 という存在にうんざりしてたんです。昔から、ある幼なじみの 女 に散々振り回され続けてきましたから……。女 なんて、自分が淋しい時だけ甘い言葉で摺り寄ってきて、他に好きな男が出来れば簡単に切り捨ててしまふ。幼なじみが、まさにそんな奴ですからね。」

でも、鈴村さんだけは違ふと思っただんです。男嫌い だからというのもあるんでしょうが、男に媚びを全く売らず、それどころか、

毅然とした態度で接してくる。そこは素直に好感が持てましたよ。後は……、しっかりしてそうで、意外とおっちょこちょいなトコが可愛い、とか……」

言い終えてから、誉はハツとした。また、最後に余計な事を言ってしまった。

絶対に怒られる。そう思ったのだが、一穂の反応は意外なものだった。

「『可愛い』なんて、生まれて初めて言われたわよ」

怒るところか、笑いを含んだ口調で言った。

「私、この性格でしょ？ 家族にも、倫子にも、口を揃えて『可愛げがなさ過ぎる』って言われ続けてたのよ。まあ、自覚は十分にあったから、別に腹も立たなかったけど。」

でも、『可愛い』って言われるのも悪くないかも。相手が高橋君だから、っていうのもあるのかも知れないけど」

一穂は、ありがとう、と続けてから、ニツコリと笑んだ。

途端に、誉は目を瞠った。これまで、満面の笑みを見た事がなかっただけに、この人もこんな風に笑えるのか、と驚いた瞬間だった。同時に、胸の鼓動が早鐘を打った。

（この状況でその笑顔は反則だろ！）

さすがの誉も、自我を抑えられるかどうか不安になってきた。もちろん、無闇に手を出すつもりは毛頭ないが、誉も男なのだから、いつ、理性が吹っ飛んでもおかしくない。

一方、一穂は、誉の心の葛藤に気付いている様子が全くない。ぼんやりとしている誉を、不思議そうに見つめている。

「高橋君、どうしたの？ 具合悪くなった？」

今度は、身を乗り出して、誉に顔を近付けてくる。

（大丈夫だ！ 大丈夫だから離れてくれ！）

願うように思っても、一穂は、やはり察してくれない。

もう、我慢の限界だった。頭で考えるより先に、誉の両腕は勝手に動き、一穂の身体を自らの元へと引き寄せてしまった。

「高橋君、急にどうして……」

「当たり前でしょ。こんな密室で女性に熱い視線を送られたんじゃ正気でいられませんよ」

半ば自棄になって誉は言った。

「男は女性が思う以上に単純な生き物なんです。女性にとっては些細な行為であつても、男は過剰に反応して期待してしまうものなんですよ」

誉は、一穂を抱き締めたままの格好で訊ねた。

「所詮はただの男だった俺を、あなたは軽蔑しますか？」

誉の腕の中で、一穂は硬直している。彼女の戸惑いは、身体を通して伝わってきた。

「軽蔑は、しない……」

暫しの間を置いて、囁くように一穂が言った。

「怖くないって言えば嘘になるけど、高橋君だから大丈夫。でも……」

「『でも』、何ですか？」

「この姿勢、かなりキツいんだけど……」

一穂の言葉で、誉は改めて、彼女の体勢を見た。上半身だけを引き寄せられ、下半身は運転席に乗ったままの状態だから、確かに辛そうだ。

「す、すいません！」

我に返り、ようやく、一穂を誉の元から放した。

誉から解放された一穂は、上半身を運転席へ戻すと、何度も自らの腰を擦った。

「それにしても、高橋君も意外と強引なトコがあつたのね」

「すいません……」

「もういいから」

一穂は苦笑いを浮かべてはいたが、『もういいから』の一言の中に、刺々しさは微塵も感じられなかった。

「私も、高橋君の事は……、その……、別に嫌いじゃないし……」。

それに、心底嫌だと思っていれば、昨日の事を謝ろうなんて考えもしなかったと思う……。

他の男の人に嫌われるのは何とも思わない。けど、高橋君にだけは……、絶対嫌われたくない……」

俯き加減に語る一穂は、年上の女性とは思えないほど初々しい。あまりの可愛らしさに、誉はまた、一穂を抱き寄せてしまいそうになったが、今度はどうにか自分を制御させた。

「鈴木さん」

一息吐いた後、誉は、意を決して口にした。

「今度、休みが重なる日があったら、二人で逢いませんか？」

これは、精一杯の勇気だった。一穂の気持ちも自分に傾いているから、断られる事はない。とは思うものの、やはり、不安は完全には拭い去れない。

息をするのも忘れるほど、誉は一穂からの返事を待った。

「取り敢えず、今週の金曜は休み」

サラリと返ってきた。

今週の金曜日　確か、誉も休みになっていたような気がするが、自信がない。帰ってから、改めて調べてみた方が良さそうだ。

「その日、休みになっているかどうか後で教えます」

そう告げると、一穂は、「分かった」と頷いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2026w/>

Clumsy Love

2011年10月9日03時26分発行